

のマツタケを、毎年5～6本を採るのがやっとならったが、妹たちの時代には3kg以上も採れていたらしい。

梅雨があがったころ雑木林の中を歩きまわって散在するマダケの竹の皮を拾った、直径10cmもあるマダケの皮を集めるのは気持ちがよかった、皮は広げて板に挟んで重い石を乗せて置いた、買い集める人が来るのである。

父親に連れられてヌルデの葉につくヌルデミミフシの虫えい（五倍子）を採って回ったことがある、フシと呼んでいた。葉が膨らんで耳たぶのようになり、さわると感触はよいが、割って中を見ると黒いアブラムシがうごめいていた。これにはタンニンの含有が多く、インクなどを作るのに使われ、高値で売っていたようだ。生き物と関わりの深い童の生活は村の学校を出るまで兄弟姉妹に引き継がれてきたのである。